

イタビカズラ *Ficus nipponica* Franch. et Sav.

クワ科 Moraceae

1. 利用対象部位：韌皮繊維

2. 組織形態：

4年目と思われる蔓（茎）の横断面では、表皮は既に剥離し、周皮が形成されている。周皮の内側の一次組織の柔細胞は引き延ばされ、その内側に一次組織からなる繊維組織の環（一次繊維環と仮称）があるが、肥大成長によりそれぞれ離れねばなれになっている。繊維細胞は断面が丸みを帯びた多角形で、10細胞程度と少ない量で繊維塊を作り、わずかに柔細胞をまじえる。

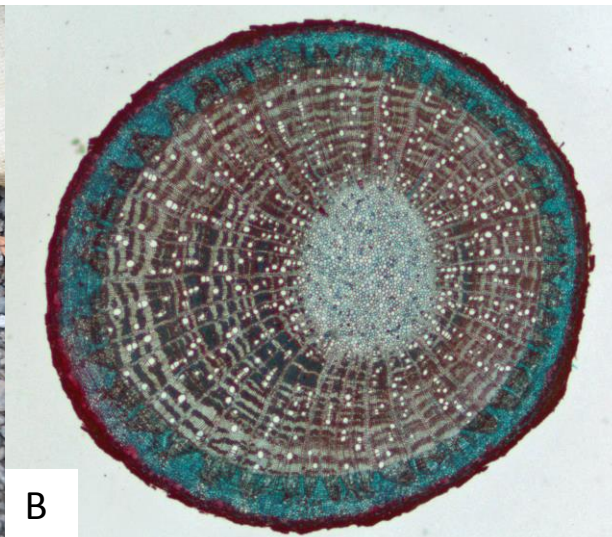
一次組織の分化に引きつづいて二次組織が形成され、内樹皮では拡散型放射組織により二次篩部は三角形状を呈し、一次繊維塊はこの三角形の先端にある。二次篩部には繊維細胞が分化を始め、ほぼ環状に連なって形成されるが、放射組織が拡散拡大することにより縦に分断される。繊維細胞の断面形態、細胞の大きさは二つの繊維環で変わらない。

3. 利用例：なし（?）

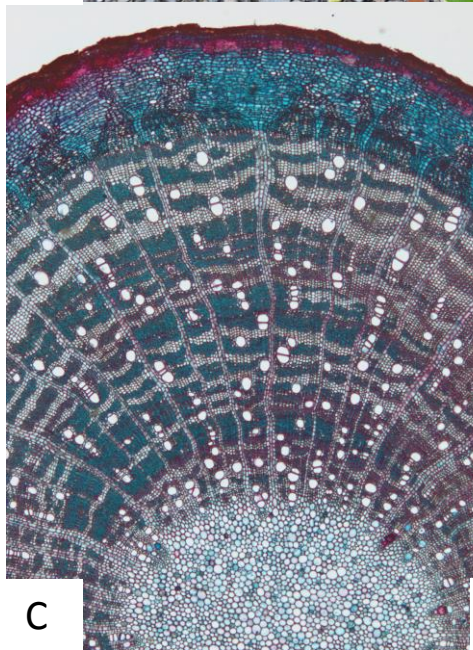
4. 遺跡出土遺物：なし



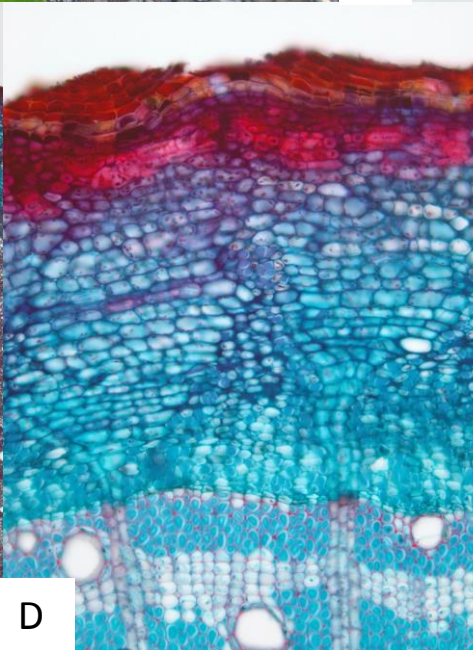
A



B



C



D



E

A:収穫されたイタビカズラの蔓(千葉県清澄山)。B~E:四年生と思われるイタビカズラの茎(蔓)の横断面とその拡大。二次木部の多数の同心円は木部繊維の層と木部柔組織の層が交互にあることに依る。表皮は既に剥落し、周皮が形成されている。内樹皮には拡散放射組織と三角形の二次篩部がある。一次繊維組織は一次組織分化時には一次繊維環をなしていたが、肥大成長により分離し、二次篩部の三角形の先端にある。二次篩部内に繊維組織は分化するが、拡散放射組織により断続的な環となっている。